日中友好交流プログラム 2019・報告書

土佐さきがけプログラム国際人材育成コース２年
飯田里奈

１．事前準備

必要だった事前準備は、安徽大学と高知県人同窓会でのプレゼンテーション、そして受け入れ行事でのプレゼンテーション、そしてよさこい踊りをマスターすることでした。今思い返すと、プレゼンテーションのクオリティーが偏ってしまったと反省しています。高知県人会でのプレゼンテーションが練習不足だったと感じました。よさこい踊りは、数をこなすにつれて上達していったように感じたので、練習の地点で上達を経験しなければならなかったと思いました。

２．安徽省での活動

博物館、企業訪問

博物館では、中国の文化を感じることができました。日本文化は中国文化に影響を受けているだけあって、絵画や造形物などを見ていて懐かしさを感じました。また、企業訪問では最先端の AI 技術を目の当たりにしました。日本の最新のテクノロジーがどんなものかは詳しくわからないのですが、翻訳機や自動運転記述など、日本に引け劣らない若しくは日本に勝る高度なテクノロジーを持っていると感じました。さらに、日立の工場を訪れた際、日本人数名とたくさんの中国人がともに働いている環境を目にして、新鮮さを感じました。このように日本と中国が手を取り合って、個人個人のレベルから国と国の関係まで友好関係を築けたらなと思いました。

安徽大学でのプレゼン

安徽大学でのプレゼンテーションは一番しっかり準備して望めました。何度も練習をしていたので、落ち着いて自信を持って臨むことができました。よさこい踊りは安徽大学生も楽しんでくれていたので、私もとても嬉しかったです。また、さらに嬉しかったことは、去年安徽大学から高知大学へ留学していたモウ・リさんと再会できたことです。まさかお互い再会できるとは思っていませんでした。彼女の流暢な日本語もさることながら、彼女のプレゼンテーションに感銘を受けました。とても立派で頑張っている彼女を見て、将来中国で日本語の先生になりたいという彼女の夢を聞いて、私自身の頑張る活力になりました。

レセプション

レセプションで印象的だったのは、席が隣だった方と英語と中国語、そして翻訳機を通じて会話をしたことです。意味のある話をしたかと聞かれるとそうとは言えないのですが、コミュニケーションを取ろうとしてくださったことが嬉しかったし、私はそれを通じて大切なことを学びました。それは、自分とは異なる言語を操る人と対峙した際、言語だけがコミュニケーションの手段ではないということです。コミュニケーション手段は多様にあり、言語ができないからといって臆することはないのだと気付きました。自分自身のコミュニケーションを取ろうとする態度や意欲が大切なのだと思いました。

３．上海での活動

上海県人会

上海の県人会は前日の安徽省での活動よりも比較的カジュアルな雰囲気でした。席が大学の先生方や同窓会に出席された方と学生と別れていたからだったのかもしれません。その中でも忘れられない出会いがありました。私の隣の席に座っていた曽さんとの出会いです。翻訳の会社を営んでいる中国人の方でした。どんなことを勉強しているのか、将来はどんなことをしたいのかなど、積極的に話しかけていただきました。その流れで、将来やりたいことが今学んでいることとはかけ離れていて、進むか否か悩んでいるということを曽さんに打ち明けました。すると曽さんは、『人生は一度きりだから、飯田さんのやりたいことをしてください。』という言葉をくださいました。その時の私には、その曽さんの言葉が深く胸に刺さりました。あとから WeChat でのやり取りで知ったことなのですが、曽さんはかなりの苦労人であり、大変な努力家でした。あの時の曽さんの言葉が重みをはらんでいた理由が分かったと同時に、この出会いを忘れず精進しようと強く思いました。

高知大学同窓会

高知県人会での土佐さきがけプログラム国際人材育成コースの紹介プレゼンテーションは、課題が残るものだったと感じます。私自身のプレゼンテーションが、強弱のないつまらないものになってしまったと感じました。もっと伝えたいことを明確に簡潔にまとめた上で、プレゼンテーションに臨むべきだったと反省しています。

食事会

食事会では、何かにつけて乾杯する文化と中華料理と、早すぎる中国語に圧倒されていました。反省点を挙げるとすれば、いろんな方とお話するチャンスを逃してしまったことです。座ってお話を聞いて、料理を食べてという状態だったので、もっと積極的に動いてお話をしたらよかったと感じました。しかし食事会の後、高知大学に比較的最近留学していた方たちとお話ができて、非常に楽しかったです。日本語がとても流暢で、英語と中国語という他言語を勉強している身として脱帽でしたし、私も頑張らねばと身が引き締まる思いでした。

４．高知での受入活動

安徽大学生が高知大学に滞在したのはとても短い時間でしたが、充実したものでした。私自身のプレゼンテーションは内容的に楽しいものではなかったと思いますが、高知大学のサークルについて伝えることはできたと感じます。また、新しい友達もできました。安徽大学生と交流する中で、国際交流の楽しさを改めて実感しました。言葉が正確に伝わるかではなく、伝えようとする、理解しようとするところから、友情や楽しさが生まれるのだと思いました。

５．考察、その他

今回の日中友好交流プログラムを通じて、様々な気付きがありました。その中でも特筆すべきことは、「なぜ日本で中国や中国人に対し悪い印象を持っている人が多いのか」という疑問です。私は今回の訪問で、中国という場所とそこにいる人々が本当に大好きになりました。それゆえに、疑問は深まるばかりでした。プログラム終了から数日後、高校時代の友人にその疑問を話すと彼女は、中国に対しあまり良いイメージを持っていないという旨を話してくれました。そこで私はアンケートをとってみることにしました。SNS 上で協力を呼びかけたところ、やはり大学生の割合が多かったのですが、高校生から５０代の社会人の方まで６２件の回答を得ました。

形式としては、記述を多めに盛り込みました。例えば、「中国に対してどのような印象を持っていますか」という質問の回答として、１；とても悪い、５；大変良い、３をニュートラルと設定し、１～５まで選んでもらいました。そしてその次の質問に、「先ほどの質問でそのように回答したのは何故ですか」というふうに理由を記入してもらう形をとりました。

全体の傾向としてポジティブな意見が多かったです。中国人の友達がいる回答者は全体の７５．８％、中国に行った経験のある回答者は全体の６４．５％と、メディアにとらわれない自らの体験に基づいた考えを持った人が多かったから、このような結果になったのだと思いました。また、そのような経験がない人も、メディアによる報道を丸呑みにせず自分が見たもの経験したことをベースに判断したいというような考えを持った人が多かったです。ひとつ私の身内から、アンケートに対して鋭い感想をもらいました。内容は、『日本と中国とは国際問題もあるが、それは国と国の問題であって自分たちには関係ないと思って構わないか？中国人に限らず、外国の人たちとは言葉の壁があり、おそらくその言葉の壁から不信感や恐怖感といったものが生じると思う。それは相手と同じ言葉を話せるようになれば解決する問題なのでしょうか？』というものでした。国と人と、規模は全く違うが無関

係ではないし、私個人の考えでは国≒人だと思っていました。アンケートの中で私は敢えて質問を、「中国」が付く言葉にどのようなイメージを持っているか、「中国」についてどのような印象を持っているか、「中国人」についてどのような印象を持っているかに分けてみました。すると、人と国は違うという旨の回答がいくつか見られ、作成したのは自分なのですが少々困惑しました。「国」といっても、政治を連想する人もいるし、国民性を連想する人もいるから尺度や感覚が人によって違うため一概にこうだとは言えないのだと感じました。

脱線してしまいましたが、アンケートをとってみて、中国に対し良くないイメージを持っている人は思っていたより少数だったことが分かりました。また、メディアによって良くないイメージが潜在的に浸透していることに気付いている人も多くいました。初めて中国に行った身として多くの日本人に伝えたいことは、是非とも一度中国を訪れてほしいということです。中国は素敵な隣国だと、メディアの報道が全てではないのだと、私たちと何も変わらないひとりひとりが人間なのだと気付くことができると思うからです。実際に自らで触れることで、何かが壊れる瞬間があると思うのです。最初の「なぜ日本で中国や中国人に対し悪い印象を持っている人が多いのか」という疑問の一原因として、コミュニケーション不足があると思うのです。そして私は、大学生はさることながら、是非とも中高生たちに中国と関わる機会を多く与えてほしいと強く感じました。未来ある学生たちに頼もしい隣国をもっと知ってほしいのです。実際に訪れなくとも世界の裏側の情報が手に入る現代だからこそ、誤った情報に振り回されず、自分で動く行動力や自分の眼で見た情報を大切にしてほしいと思ったし、私もそうしていきたいと思いました。